

やまがたじょうさん まる 山形城三の丸跡（第23次）

遺跡番号	201-003
調査次数	第23次
所在地	山形県山形市本町1丁目外
北緯・東経	38度15分2秒・140度20分6秒
調査委託者	山形県村山総合支庁建設部都市計画課
起因事業	山形広域都市計画道路事業3・2・5号旅籠町八日町線
調査面積	1,250㎡
受託期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日
現地調査	令和4年6月6日～11月25日
調査担当者	渡辺和行（現場責任者）・小林圭一・齋藤健
調査協力	山形市企画調整部文化振興課
遺跡種別	集落跡・城郭跡
時代	奈良・平安・中世・近世
遺構	竪穴建物・土坑・石組み遺構・柱穴
遺物	土師器・須恵器・陶磁器・金属製品（文化財認定箱数：39箱）



遺跡位置図（S = 1:50,000）

調査の概要

今回の調査は、山形広域都市計画道路事業3・2・5号旅籠町八日町線における昨年に続いての調査である。また、山形城三の丸跡においては当センターで行う23回目の調査となっている。

昨年度は、1から4の調査区を設定し、6月21日から10月29日まで830㎡に対して調査を行った。調査の結果、古代から近世までの遺構・遺物を確認した。1区からは、16世紀末～17世紀初頭の陶磁器類が出土している。最上義光が統治していた時期であり、江戸時

代初期である。2～4区では、近世後半の遺物や遺構が検出されている。堀田氏時代の赤瓦なども出土した。また、奈良・平安時代の竪穴建物跡も見つかっており、特に2区と4区では、8m四方もある大型の竪穴建物が見つかっている。当時の一般的な住居の大きさが4m四方程度であることを考えると検出された竪穴建物の大きさは際立っている。一般的な住居とは違った使い方をされていた可能性が指摘できる。

今年度も調査区を4区画設定し、5～8区として調査を行った。

遺構と遺物

5区は、近世の遺構が良く残っており、石を重ねて構築した井戸等が検出された。山形城三の丸跡では近世に入ると石を構築材として利用する状況が多く確認できる。特に5区の南側で検出された井戸は井戸枠を石で構築しており、2m60cm以上の深さがある。遺物は近世後半の陶磁器類が出土している。全て覆土からの出土であるため、それ以前に使用されていた井戸と考えられる。井戸の周辺からは同様に石を四方で積み上げ囲った遺構も見つかっている。こういった遺構は円形の物も含め、三の丸の調査で度々検出されており水場関係の遺構

ではないかと推測されている。この遺構も近世後半の遺物が出土しているため先ほどの井戸と同時期に使用されていたと考えられる。さらには、石を廃棄した2mほどの深さを持つ大型の土坑も確認されている。覆土には直径20cm～30cm程度の石も含まれており、石を使用した何らかの遺構を壊しうめたものと想定できる。土坑の深さを考慮すると井戸であった可能性がある。

その他に柱穴や土坑が検出されている。それらの遺構から出土した遺物のほとんどが近世後半の陶磁器類や瓦などである。これらの遺構は井戸も含めて同時期に存在していたと考えられる。また、奈良・平安時代の竪穴建物も2棟確認されている。遺構のほとんどが近世の遺構に壊されており、一部分が残存している状態であった。

6区では北側に大きな土坑が検出された。調査区内で検出できたのは半分にも満たないため、遺構の性格は不明である。瓦や陶磁器が出土しており、近世後半のものと考えられる。6区は近世以降の開発により、削平を受けたと考えられ、中央から南側では遺構があまり確認されなかった。西側には数基確認出来ており、続く道路下には遺構が残っていると考えられる。

7区では上層で近世・近代の遺構・遺物、下層では奈良・平安時代の遺構・遺物が出土された。上層では5区で見られたような石組遺構や、地下施設と考えられる遺構が確認されている。地下施設と考えられる遺構の中には土止めのための板と杭の痕跡を確認できるものもみられた。また、近代以降に構築された石組み遺構では内側になる石を割って面を作り出す加工などもみられた。遺物は近世後半や明治期のものが多く出土している。下層では、竪穴建物が2棟見つかり、いずれも4m四方の一般的な大きさの建物である。遺物の年代から奈良時代後半から平安時代初期に埋没したと考えられる。床の一部に粘土などを用いて凹凸をなくした張り床が2棟ともに確認できた。また、調査区北側で検出した竪穴建物ではカマドのほとんどが近世の遺構により壊されていたが、長胴鍋の底部を逆位にし支柱にしたとみられる状況が確認出来た。柱は建物内部で検出された。貼り床を貼る前に柱を建て建物を放棄する段階に抜き取ったと考えられる痕跡がみられた。南側で検出した竪穴建物では、カマドと煙道が確認できた。カマドは南東隅に設けられており、袖の芯材として直径約40～50cmの石が

使用されていた。石は貼り床を貼る前に据え付けられており、カマドの位置は建物を構築する初期段階で位置決めされていたことを指摘できる。また、芯材を粘土質の土で覆ってカマドとしており、この段階で焼土の硬化面が確認出来た。また、さらにその後に黒色土と黄色の粘土を混ぜた土で再構築したような状況も確認出来た。この建物は柱が内部に確認出来なかった。外に建てた柱で屋根を支えていたとみられる。

8区では南側で河川跡が検出された。遺物は少なく、平安時代の須恵器1点が出土しているのみである。この河川は平安時代に埋没した可能性を指摘できる。北側では土坑や溝跡が検出された。特に北側中央の土坑からは近世前半の瓦や陶磁器が出土している。この地区は、昨年調査した1区に隣接した調査区であり、昨年度も近世前半に属する遺物が出土している。

昨年度及び今年度の調査で、各時代及び時期による土地利用の状況が見えてきたといえる。今後、今まで調査された三の丸のデータを含め、慎重に検討を行いたい。

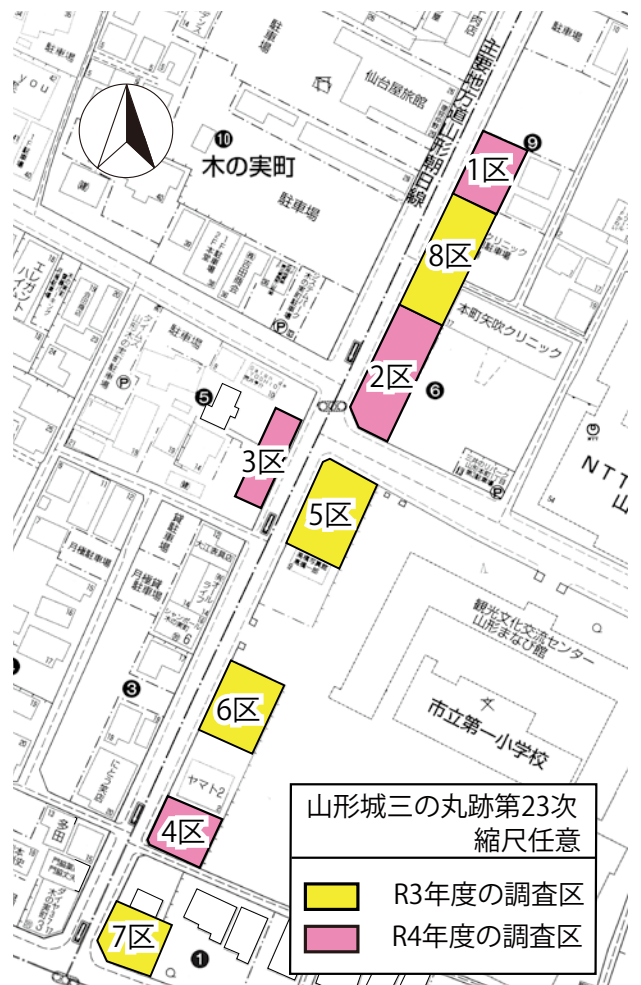


図1 山形城三の丸第23次調査区概要図



図2 5区完掘の全体オルソ図（上が北）縮尺任意



写真1 5区：井戸跡 SE327



写真2 5区：土坑 SK310 遺物出土状況

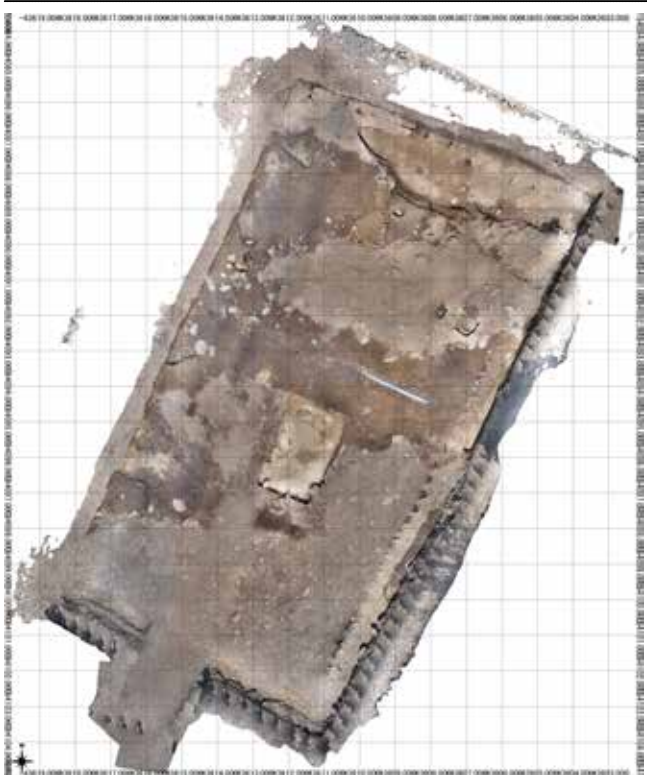


図3 6区完掘のオルソ図（上が北）縮尺任意



写真3 6区：性格不明遺構 SX200 完掘状況



写真4 6区：性格不明遺構 SX200 土層堆積

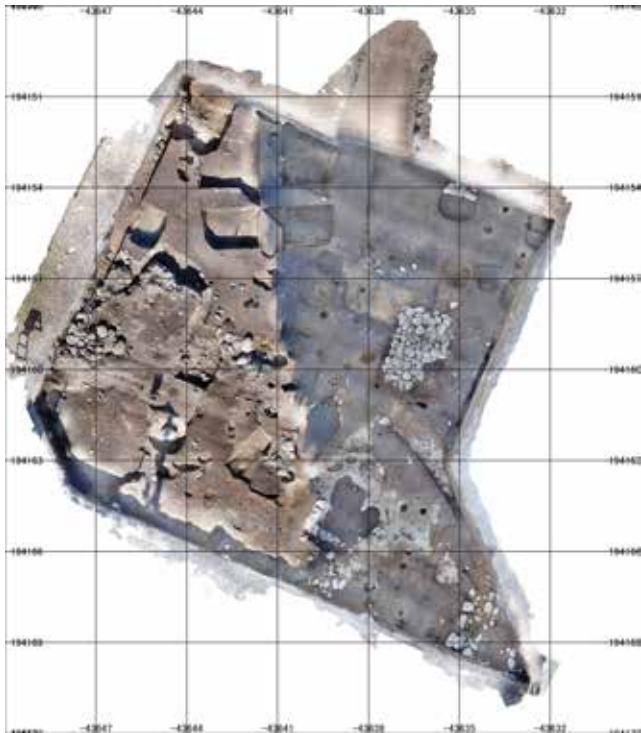


図4 7区南完掘の全体オルソ図（上が北）縮尺任意



写真5 7区南：竪穴建物 ST458 床面検出状況



写真6 7区南：竪穴建物 ST455 カマド

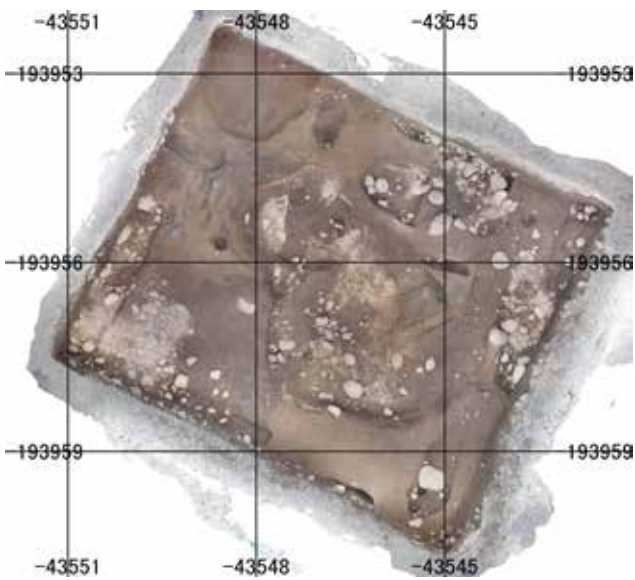


図5 8区北完掘の全体オルソ図（上が北）縮尺任意



写真7 8区北：性格不明遺構 SX516 土層堆積



写真8 8区北：性格不明遺構 SX516 土層遺物